

フランスでは高齢者をどう支えている？ 政府は自宅で長く暮らすのを重視、家族 の手に負えなくなれば躊躇なく他へ…。 日本のような「どうにもならない」悲劇が 起こりえない理由

1982 年、年 5 週間（年間 30 日間）の有給休暇を法制化したフランス。有給取得率も 100%に近いと言われるほど高く、「バカンス大国」として、国民は豊かな暮らしを謳歌している印象があります。一方、フランス・ブルターニュ地方で生活しながら、田舎暮らしをブログで発信しているのが旅行ジャーナリストのシャルバーグ八千代さん。八千代さんは「できないことをできる人にお願いする。フランスなら当たり前のこと」と言っていて——。◆どちらかに合わせるのは無理だった 2009 年、88 歳で義母が亡くなり一人になってしまった義父。彼には資力があつたので、その後の暮らしにいくつかの選択肢がありました。生まれ育ったパリで有料のケア付き施設に入る。私たちの家に比較的近いところにある同様の施設に入る。あるいは、我が家の手付かずだった半分を至急直してそこに住む。彼が選んだのは、三番目の選択肢。二世帯住宅にして、私たちと一緒に住むことでした。隣人生活を始めた当初、「二世帯でも食事くらいは」と思った私は、毎夕食そろって一緒に食べることを提案しました。でも、これはまったくの失敗でした。以前から義父の夕食時間は決まっていて、必ずテーブルについて食事をしていました。ところが私たちは、日によって食事時間が違うし、時にはピクニックと言って用意した物を各自好きな時に好きなように食べることもありました。はじめから、どちらかに合わせるのは無理だったのです。いつもテーブルについてきちんと食べることに夫は疲れ、かといって義父はいい加減なピクニックは嫌いでした。私は私で決まった時間にみんなが食べられるように用意するのに疲れました。◆お互いの生活リズムを尊重しつつ、独立して暮らす 結局、1 週間ぐらいでギブアップ。その後、昼は義父が自分で好きなものを用意して食べ、夕食は私がメインを 4 人分作り、先に義父にとり分けて届けるようにしたのです。その代わり、日曜日、祝祭日、誕生日など特別な日の昼食は、必ずそろって食べました。これは、私のせめてもの気持ちでした。「嫁」の義務ではなく、好意でしたことです。多分、何もしなくても問題ではありませんし、義父が自分でやるのが嫌だったら外部の人を頼んだでしょう。フランスでも 60 年代までは、田舎だと三世代同居も当たり前だったといえます。主に主婦が上

の世代の面倒をみていたそうですが、核家族化が進み、時代も変わりました。食事を別にした分、夫は仕事から戻ると義父のところへ行き、ひとしきり話をするのが日課でした。といっても単なる世間話ではなく、政治や社会情勢についての議論をするのです。夫と話すのは義父の楽しみでもありました。私は、日中留守を頼むとか、買い物に行くけど必要なものがないかと尋ねるとか、日常的な部分で繋がって、お互いの生活リズムを尊重しつつ、独立して暮らしました。

◆フランスの高齢者の暮らし フランスでは、一人暮らしが可能なうちは、みな自宅や自分のアパートで暮らしています。女性が多数ですが、男性もいます。家事は最低限は一人でこなします。孤独という面は否めませんが、田舎は近所の人や郵便配達の人が見守ってくれます。都会だと最近、若い学生に割安で部屋を貸し、時々一緒に食事をしたり、手伝ってもらったり、話し相手になってもらう、そんな相互扶助も成り立っています。高齢者施設への入所を本人が決めることも、また家族と相談の上で決めるのも普通です。反対に自分の家にいたければ、例外はありますが基本的に本人の意思が尊重されます。近年政府もできる限り自宅で長く暮らすことを重視し、それに対応する経済的及び人的援助制度も考えられています。

◆できないことは人を頼る 義父のお母さん、夫の祖母にあたる人は90歳を過ぎてもパリで一人暮らしでした。それを維持するため、ウィークデーの日中と夜担当で二人、週末の担当一人、計三人の人を義父は頼んでいました。さらに義父は、ほぼ毎週のように自宅のあるリヨンからパリへ行っていましたし、電話は毎日していました。94歳で亡くなる2年ほど前からアルツハイマーが進み、パリでは無理になり、彼らの家の近くにある施設に入ってもらいましたが、二人で週に何回も見舞っていました。息子でも娘でも、生涯独身だと親と一緒に住み、亡くなるまで面倒を見る人も少なからずいます。ただ、ブルターニュの私の周りを見ても、親を施設に入れている人がほとんどです。できないことをできる人にお願いする。フランスなら当たり前のことです。もし、どこかの時点で家族の手に負えなくなったら、躊躇なく他を頼ります。お金があれば有料の施設や義父のように人を雇うし、なければ行政の枠内での支援を頼ります。他に頼ることに抵抗を感じる人はいません。だから、日本のように一人で何もかも引き受けてしまい、結果どうにもならないという悲劇は起こりません。フランスの福祉も完璧ではありませんが、試行錯誤を重ねながら今のところ何とか機能しています。※本稿は、『フランス・ブルターニュで見つけたお金をかけない豊かな暮らし』（大和書房）の一部を再編集したものです。

シャルバーグ八千代